

## 目次

1	時と競う旅	7
2	伯爵と看守と女相続人	35
3	十五世紀の司教杖	67
4	黄色い犬	93
5	五三号室の盗難事件	117
6	物見櫓の秘密	139
7	影法師	171
8	荒野の謎	193
9	セント・モーキル島	215
10	法廷外調査	243
11	二個目のカプセル	273
12	おじと二人のおい	293
13	特許番号三十三	321
14	セルチェスターの祈禱書	351
15	市長室の殺人	375
	訳者あとがき	407
	解説 ストラングル・成田	409

バービカンの秘密

## 第一章

ある春の土曜日の午後、一時まであと五分というところ。ウォルフオードの建築請負会社（ワトソン&メトカーフ）の事務主任レッドビターの頭の中は、目前に迫った週末への喜びでいっぱいだった。若く勤勉で熱意にあふれた彼は、月曜から土曜まで常に全力で仕事に打ち込んでいる。そんな彼でも、土曜日がやってくるたびにありがたいと思わずにいられない。土曜という日にはそれだけの価値があった。レッドビターは結婚三年目で、息子はようやくちよちよ歩きを始め、片言で喋りだしたところだ。土曜日の午後になると、彼は息子を公園に連れていき、おぼつかない足取りに気を配りながら池に浮かぶアヒルやカモの話をしてやる。だが土曜日が何よりすばらしいのは、次に日曜日がやってくるからだ。日曜日には普段より一時間長くベッドにもぐっていられるし、朝食も最後まであわてずにゆっくりとれる。日曜日には夫婦そろって両親の家へ孫の成長を見せにいく。そう、土曜日と日曜日こそ、味気ない労働の日々におけるオアシス——のんびりと休息を楽しめる至福のときなのだ。ほくには何より必要なものだ。レッドビターはそう考えた。あと三分で、時計が一時を打つ。そうしたら、彼は自由の身となって家に飛んで帰り——。

レッドビターが机の引き出しに鍵を掛けていると、部長のシャーマンがそばに来て尋ねた。

「（ステイール&カーダイク）の入札書は間違いないが昨日送ってくれただろうね」

「はい、もちろん！」レッドビターは答えた。「昨夜送りました」

「当然、書留でだろうね？」

「はい、書留にしました」

シャーマンは机の上にあつた帳面を手に取り、ページをめくつた。「領収書が見当たらないが。まだ貼っていないのか？」

「家にある、別のチョッキのポケットに入れたものですから」レッドビターは答えた。「月曜日に持つてまいります」

「忘れずに持つてきてくれよ」シャーマンは念を押した。「こういう領収書は必ずすぐに貼っておくものだ。入札書を送つてあることを役所に示さねばならんのだから」

シャーマンが自分の席に戻つたので、レッドビターは挨拶もそこそこに急いで退社した。外に出るとほっとした。あれ以上喋らされたらたまらない——シャーマンの視線にも耐えられなかつた。なぜなら、入札書はすでに書留でロンドンに送つてあり、領収書は家にあると告げたまさにその瞬間に、まだ書類を送つてもいなければ、領収書を手に入れてもいけないことを思い出したからだ。こうして彼は泡をくつて会社を出た。

レッドビターは賢明な若者だったので、自分がよい職に就いていることを自覚していたし、それを失うようなことはなんとしても避けねばならないと承知していた。ヘウトソン&メトカーフに就職して七年になるが、現在の報酬は週四ポンドで、堅実に昇給している。優秀な社員として上司にも恵まれ、入社以来これといった失敗もせずをやつてきた。しかし今度ばかりはへまをした。五十万ポンドもの大金が絡む入札書の送付を失念するとは！確かに、見かけは何の変哲もない書類だった。事

務所の普通の便箋にワトソンが切りのよい数字を書き込み、押印して封筒に入れただけのものだ。

もしこれがかさの張る重い書類であったなら、レッドビターも決して忘れるようなことはなかっただろう。しかし実際は小さなものだったので、昼食をとりながら家に戻る途中、書留で送るつもりでいながら、着ていた冬用チョッキの内ポケットにするりと入れたきり、記憶から抜け落ちてしまった。なぜこんな大切なことを忘れてしまったのか、自分でも説明がつかない。ただ、道すがら冬用のチョッキでは暑くなってきたことに気づき、家でもっと軽いものに替えたことはよく覚えていいる。もちろん、入札書はちゃんと家にある。早く帰って郵便局に出しにいかう。なに、必ず間に合う。ヘステイール&カーダイクが求めている入札書は、郵送あるいは持参で月曜日の午後四時までにロンドンの彼らの事務所に届けなければならないが、時間はたっぷりある。今度は気をつけて、すぐに書留で送ろう。彼が唯一恐れたのは、もしシャーマンが郵便局の領収書を調べたら、手紙が送られたのが金曜日ではなく土曜日だと気づくかもしれないということだ。しかしシャーマンのことだから、領収書が決まりどおり帳面に貼られていると聞けば、満足してちらりとも見はしないだろう。だから大事なのは、入札書が月曜日の朝一番にロンドンに届いているように郵送しておくことだ。

レッドビターの住むささやかな家は街の中心からわずかに離れたところにあつた。彼がドアを開けると、玄関にはビーフステーキと玉葱の心弾む匂いが漂っていた。妻は彼の足音を聞きつけるとすぐさま、昼食の用意ができていると呼びかけた。

しかし、レッドビターはあとにしてくれと叫ぶなり、寝室への階段を駆け上がった。そして自分の服がしまつてある箆筒に駆け寄つたが、その直後には階段の上からわめいていた。

「ファニー、ぼくの冬用のチョッキはどこだ？」彼は矢継ぎ早に叫んだ。「あれをどこへやった？

ほら、昨日の昼、食事に戻ったとき脱いだチョッキだよ」

レッドビター夫人が奥の部屋から顔を出した。

「いやだわ、ハーバート。あなただったら、忘れたの？ 二週間前だったかしら、あのチョッキはもう古くなつたから、春になったら他の古着と一緒に売ってしまった方がいいと言つたじゃない。だから昨日の午後、ひとまとめにして売つたのよ。それでね——」

レッドビターは家が揺れるかと思うほど盛大なうめき声をもらした。そして階段を一段飛ばしで降りてきた。妻は悲鳴を上げかけたが、夫の真つ青な顔を目にして声を失つた。

「きみは——きみはあれを売ってしまったのか！」彼はかすれた声でもりながら言つた。「なんてことだ！ いったい誰に？」

「もちろん、ミルソンの店よ！」レッドビター夫人は答えた。「それでね——」

レッドビターはすでに玄關口にいた。そのまま小さな庭の門から通りへ駆け抜けていった彼の耳には何も入らず、周囲の光景も半分しか目に入っていないかつた。妻の必死に呼ぶ声も、まるで道の敷石に投げかけられたようなものだった。

「ハーバート、戻ってきて、ハーバート！ ハーバートつたら！」彼女は夫の背中に向かつて叫んだ。「わけを聞かせて——」

しかし完全にひとつ事に取りつかれたレッドビターにその声は届かず、彼は一目散に街へと駆けていった。

ミルソンはウォルフオードではなかなか知られた顔だった。手広く古着を扱っていて、服の古さや状態を問わず、どんなものでも買い取る。しかも、かなりよい値をつけた。それが彼の一方の仕事だ

った。もう一方の仕事は売るほうだ。買い取った着古しの衣料をミルソンがどう処理するのは、誰にとつても謎だった。しかし彼が常に途方もなく大量の古着を抱えていて、それらがあり得ないほどの安値ながら新品同様に見えるのも、紛れもない事実だった。古着はミルソンの店のある部門に運ばれると、驚くべき変貌をとげ、やがて新品のような顔をして現れる。丁寧に洗濯され、アイロンをかけられて、客が一度に何着でも買ってしまいたくなるような値札がさげられるのだ。

レッドビターはミルソンの本店に飛び込むと、本人のもとへ駆けつけた。ミルソンはずんぐりした小男で、山羊髭をたくわえ、でっぶりした胴回りにずっしりした大きな金鎖を巻いていた。レッドビターはミルソンに詰め寄り、必死に息を整えようとした。

「昨日、わたしの妻から古着を買ったでしょう！」彼は上ずった声で言った。「レッドビターですよ、アカシア通りの——ほら」

「ああ、買ったとも」ミルソンは気さくに答えた。「値段には満足してもらえたと思うが？」

「値段なんてどうでもいいんだ！」思わず声が高くなった。「ぼくはあの中にあつた冬用のチョッキがほしいんです——えんじに黒い水玉の、フランネルの裏地のついた——。どうしてもあれがいるんです。妻はあれを売ってはいけなかつたんです」

「気の毒だがね、それはできない相談だ」古着屋の主人は指輪をはめた両手をこすりながら答えた。「妙な話だが、あのチョッキは買ってからすぐ売ることになったんだ。あんたの奥さんのところから店に戻ってきて、ひとまとめにした服を仕分けようとそこのカウンターに置いたとたん、男がひとり入ってきてね。奴さん、あのチョッキがひと目で気に入って、すぐさまお買い上げさ——目当てのあつたかい服と一緒に。そいつは伐採が生業でね、ちやうど移住するところだつたんだよ——カナダ

に」

「カナダ！」レッドビターは金切り声を上げた。「それで——その男はもう出発したんですか？」

ミルソンは口の端から太い葉巻をはずすと大仰に振った。

「今頃はもう出発しちまったかもしれないな。ひよいと思ひ出したんだが、奴さん、今日、出発するつもりだと言った。なにせ伐採屋だからな、いわゆるひと山あてに、きつい風が吹き荒れる、雪と氷の冷たい地方に出かけようっていうわけさ。でもって、あつたかい衣服をどつさり持つていくほうがいいと考えたんだらう。そんなわけで」ミルソンは両手をポケットに突っ込んで金をじゃらじゃら鳴らしながらこう締めくくった。「そんなわけで、喜んで売ってやったのさ。そして儲かった——互いにな」

レッドビターは恐ろしいまでに落ち着いていた。彼は人生で初めて、物書き連中の言う、絶望のあまり冷静になるといふ言葉の意味がわかりかけていた。

「その男がウォルフオードのどこに住んでいるか、知らないでしょうね」彼は尋ねた。

「いやいや、知っているとも！」ミルソンは答えた。「あるいは知っていた、と言うべきかな。さっきも言ったように、もう出発しちまっただろうからな。名前はテリー、住所はミル通りの角を曲がったところにあるバーコーの下宿屋だ。昨晚、そこ宛てに荷物を送ったからな。それにしてもおまえさん、なんで今になって、あのチョッキをそんなにほしがるんだね？ わけを——」

しかしレッドビターはもうドアの外にいて、ミル通りに向かって走り出していた。そこは街で最も貧しい一画にある狭い裏通りで、認可宿泊所が並ぶことで知られていた。レッドビターは血眼になってバーコーの下宿屋を探した。そしてようやく黒い板に白文字で書かれたその名を目にとらえた。玄

関前の階段に腰掛けていた数人の間を駆け抜け、白い漆喰塗りの廊下に飛び込み、気づくと彼はその管理人と向かい合っていた。管理人は大柄で気性の荒そうな男で、まるで招かれざる客を迎えたかのように彼にしかめ面を向けている。

「何かご用かね？」

「ここにテリーという人がいませんか？」レッドビターは息を切らせながら尋ねた。「昨日、ここにいたことはわかってるんです。ミルソンという古着屋がそう言っていました。彼に会いたいんです

——大至急」

「そうかね」管理人は鼻で笑った。「お生憎さま！ もう出ていったよ」

「どこへです？」レッドビターは食いさがった。

「カナダだよ」代理人はびしゃりと言った。「カナダに行ったんだ。ちよつとやそつとの距離じゃない」

「でも——どうやって？」レッドビターはさすがのように尋ねた。「どこへ——いや、つまり——彼はどこから船に乗るんですか？」

管理人は肩までむき出しになった太い両腕を組んだ。そして両肘を掻きながら、レッドビターを品定めした。

「なんだって知りたいんだね？」脅すような口調だった。「おれはお客様の個人的なことをよそ者にべらべら喋ったりはしない。あんたはデカじゃない。それはわかる。見たところ、弁護士の手助けって感じだが」

レッドビターは相手の言葉に飛びついた。

「そうなんですよ！ われわれがそのテリーさんを探しているのは、彼の利益になることがあるからです——金銭的にね。もし彼が渡航する前につかまえられればの話ですが」

レッドビターが半クラウン銀貨をそつと握らせると、管理人は態度を和らげた。

「なるほど、そういうことか！ うむ、彼なら今朝、リヴァプールに向かったよ。相棒のスキヤビ―つてやつと一緒にね。今夜遅くか、明日の朝早い船に乗るつもりらしく、どっちかはわからんが、ともかくそれに間に合うように出かけていった。スターナティック号だったかな、そう聞こえた、むしろ、客室は三等だがね。テリーには会ったことがないんだろう？ 赤毛のでかい男で——」

しかし、このときもレッドビターはその場になかった。玄関先にたむろしている連中をかき分け、通りに飛び出し、セントラル駅に向かっていた。駆けながら、痛む頭の中では、三つの名前が制御不能になった蒸気ハンマーのように鳴り響いていた。テリー——リヴァプール——スターナティック！ スターナティック——リヴァプール——テリー！ リヴァプール——テリー——スターナティック！ それ以外のものはすべて世界からかき消えた。家庭も、妻も、幼い息子も、何もかも！ この手にあの忌々しい手紙をつかむまでは、決して何も取り戻せないだろう。

レッドビターは広い駅の切符売り場に駆けつけると、窓口の台にソブリン金貨を叩きつけ、しゃがんだ声でリヴァプール行き切符を求めた。

「列車は——列車はどのぐらいで来ますか？」彼は震える声で尋ねた。「すぐ来ますか？」

「六番線まで全速力で駆ければ」気のない目を時計に向けた駅員は、台越しに切符と釣銭を押しやりながら言った。「ぎりぎり間に合うか間に合わないかというところでしよう」

レッドビターは走った。行く手にはさまざまな人の動きがあり、ぼんやりとした意識の中で彼らに

ぶつかっているのを感じた。そのうちの何人かはレッドピターにぶつかられて苦痛の声を上げた。何人かはレッドピターより頑丈で、彼のほうが痛い目をみた。やがて彼は車掌にきつい言葉遣いとともにある場所に放り込まれ、その片隅に落ち着いた。しばらくして顔を上げると、空の客車にいるのに気づいた。列車はすでに走り出していた。窓の外に目をやると、ウォルフォード市庁舎の大きなドームがちらりと見えた。それは流れるように過ぎていった。教区教会の尖塔も、ウォルフォードの街外れに建つ家々の屋根や煙突も。やがて彼は事の重大さを認識し、ずきずきする頭を抱えて重くうめいた。

## 第二章

レッドビターがひと息ついてから最初にしたのは、自分がどこにいるのか、何を追っているのか、明確に形にすることだった。それには思ったより時間がかかった。そしてようやくはつきりと把握した。彼は今、ウォルフオーダーリヴァプール間の何百マイルに及ぶ追走の始まりにいる。その追走には三時間かかるだろう。つまり、リヴァプールに到着するのは五時頃だ。到着したらただちにスターナティックという名の船を見つけなければ。乗客名簿には数百人も名が載っているに違いない。その三等乗船客からテリーという名の男を探し出さなければならぬのだ。同じ名前の乗客が二十人近くいるかもしれない。あるいはレッドビターがスターナティック号を見つける前か、それどころかどこで見つかるかもわからないうちに起航してしまう可能性もある。そうなれば彼は一卷の終わりだ。その場でマージ川に身を投げるしかない。だが下宿屋の管理人はこう言った。「今夜遅くか、明朝早く」と。希望はある——たつぷりと。希望を持つ——その間に彼は所持金を数えた。

レッドビターはこの不本意な戦闘を成功裡に遂行するには、持ち金が重要な要素となることをじゅうぶん承知していた。例の手紙を取り戻すまで、どこへ行く羽目になるかわからないのだ。そこで彼は財布をひっくり返した。朝、出社したとき、そこには七シリング入っていた。さらに彼の週給——四ポンドが加わっている。そのあと彼は下宿屋の管理人に半クラウン与え、リヴァプールまでの汽車

賃に八シリング九ペンス支払った。だから残金は三ポンド十五シリング九ペンスになる。これだけあればかなりのことができる。そう考えて突然、妻に何ひとつ言つてこなかったことを思い出した。土曜日の決まり事であるいつもの家計費を渡すかわりに、あの癩にさわるチョッキを追つて飛び出してしまつた。まあ、これはたいした問題ではないだろう。彼女は大丈夫だ。絶対に大丈夫だ。家にも多少の蓄えは置いてあるのだから。しかし、列車が目的地に到着したらただちに、妻に電報を打たなければならぬ。

この頃にはレッドビターの空腹は限界に達していた。朝の八時から何も口にしていないのだ。今はもう、じつと座つて想像するしかない運命のもとへ運ばれていく以外、何ひとつできることはない。とあつて、腹の虫は他のいっさいの感情を排除するまでに自らを主張していた。もしかしたら列車は——急行列車はこのままどの駅も通過してしまうかもしれない。彼の知るところでは、列車にはウォルフォードからリヴァプールまで停車しないものもあるからだ。しかし幸いにも列車は停車した。数分間だがマンチェスター駅で停まつたので、レッドビターは最寄りの軽食堂に駆け込み、エール一杯を飲みくだし、サンドイッチを頬ばつた。そして再び列車が動き出したときには、ある程度空腹が満たされた状態で、電報の文面を練つていた。

電報はリヴァプール駅のホームに降り立つたらずぐに打つ。レッドビターはそう決めていた。もはや月曜日の朝一番に出社するのは無理だろう。今夜、あるいは翌日の日曜日、入札書を取り戻したら、彼は必ず自分自身の手でロンドンに届けるつもりだった。今の所持金なら、なんとかそれができる。しかし入札書を送り損ねた失敗を補い、期日までに無事に手渡したことを請け合えるまで、上司たちに何が起きたか知られたくなかつた。妻には電報で慎重に指示しなければならぬ。

列車が定刻の五時十五分にリヴァプール駅に到着すると、レッドビターはすぐさま構内の電報局に向かった。そしてさらに熟考したのち、これまでで最長の私信を送った。

「チョッキヲ追ッテキタ。月曜ノ朝マデニ戻ラナカッタトキハ、会社ニ休むと連絡シテクレ。身内ニ取り込ミガアリ急に呼び出サレタコトニセヨ。ボクノ行キ先ヤ目的ニハイッサイフレテハナラナイ。愛ヲコメテ。ハーバート」

この電文に住所を加えると、料金は一シリング九ペンスになった。レッドビターは二シリング出して釣銭を受け取ると、巨大な駅舎——苦悩と希望の混じり合った場——を出ていった。探索の旅はこれから本番だった。

レッドビターがリヴァプールに来るのはこれが初めてだった。今までリヴァプールについて考える機会はなかったし、体系だった知識もない。ここが思いがけず大都市であることに、レッドビターは困惑した。しかし彼は機知を失わなかった。そしていかにも船乗りらしい風体の男に声をかけ、どこに行けばスターナティックという名の船を見つけれられるか教えてほしいと頼んだ。

「スターナティック号か！」男は言った。「そいつは北カナダ航路だな。ウォーター街をまっすぐ行けば、事務所が見えてくるよ。大きな建物だからすぐわかるはずだ」

男は親切にもウォーター街への道を教えてくれたので、レッドビターはそちらへ足を踏み出した。やがてマホガニーのカウンターのある豪華なガラス張りの建物の中に立った彼は、近頃の海運事務所は波止場地帯の小屋などではないのだと認識を改めることとなった。

ひとりの事務員が用件を聞くために近づいてきた。学校を卒業して以来ずっと事務員を務めてきたレッドビターは、この事務員仲間の顔に浮かんだ気さくな表情を見て、事情を包み隠さず話すことにした。彼は自分の説明がたい失念のことや、そのために手紙と重要な同封物を取り戻さなければならぬことなど、すべてを打ち明けた。事務員は話を理解して、笑みを浮かべ、同情し——最後に首を振った。

「それはとんだ災難でしたね！」その声には共感が滲んでいた。「しかしその船で移住するお客は五百六百人いるんです。とうてい見つかるとは思えません」

「だが、男の名前はわかっているんだ！」レッドビターは言った。

「いやいや！」事務員は答えた。「名前なんて！ 故郷を出るときはスミスだったのがリヴァプールに着くまでにはブラウンになっているなんて例がざらにあるんです。それに、もしあなたがスターナティック号に乗り込んで呼び出しをかけたとしても、十中八九、テリーは応じやしません。お尋ね者になったとでも考えて。そうでしょう？」

「それじゃ、どうすればいいんです？」レッドビターは惨めな気持ちで尋ねた。

「スターナティック号は」事務員が熱心に彼を助けようとしているのは確かだった。「今、川にいます。浮き橋に停泊しているんですよ——黒地に緑の縞のある煙突が目印です。日曜の午後一時までは出航しないでしょうが、実際のところは十二時半ぐらいになるかもしれません。お望みなら、今夜のうちに乗船できますよ。ただし、あまりよい結果は得られないと思います」

「それはまた、どういう理由で？」レッドビターは詰め寄った。「男はその船に乗ることになっていないはずですが」

事務員は肩をすくめた。

「ええ。ただ、他のほとんどのお客と同じように、お探しの男も出航時間ぎりぎりに乗り込んでくるんじゃないでしょうか。こうした移住者たちは、希望すれば今夜は船で眠ることができません。実際にそうするお客もいます——陸で無駄遣いする金のない人々です。しかしほとんどは最後の夜を故郷イングランドで過ごします。そして出航ぎりぎりにあたふたと乗り込んでくるんですよ。もちろん、結局は乗船しないお客さんもいます。おわかりでしょうか？」

レッドビターは理解した——そしてうめいた。こんな恐ろしい可能性があるうとは予想だにしない。つた。

「どうすればいいのでしょうか？」彼は再び尋ねた。「ぼくはただ、船に行つて、この男を探せばいいと思つていた。そして——」

「なるほど、しかしその考えは間違いだつたわけですよ」事務員は言った。「さあ、あなたがしなければならぬことを教えましょう。あなたのために乗務員に一筆書きますのでね。夜更けになったら船に行き、わたしに話したことのすべてを話してください。もしその時点でお探しの男が乗つていれば、乗務員が見つかるでしょう。見つからなかつたら、明日の正午に出直してください。結局、その男は最後の最後までスターナティック号に乗らないかもしれませんが！」

レッドビターは情報提供者に心から礼を言い、もらったメモを手に出た。ようやく六時になる頃で、あと数時間はすることもない。彼は周辺をぶらついてみた。そして浮棧橋まで行き、黒地に緑の縞の煙突を目当てにスターナティック号を見つけた。それから安レストランに入つて粗末な食事をした。そのあとはひと晩じゅう棧橋付近をうろついて、それらしい風体の男の顔を舐めるように眺め

た。テリーの人相を見分けられるか確かめるためだ。そして十時になると、一艘のボートを借り、船まで漕がせた。雨が降り始めていた。凍えるような冷たい雨だった。しかもレッドビターはコートを着ていない。骨の髄まで惨めな気分だった。

乗務員は太った男で、自分の船室でラムを飲んでいた。彼はレッドビターに、あんたもこのメモを書いたやつも、おれが今夜ひと晩と日曜の午前いっぱいを使って、今、あるいはこれから三等客室に乗り込んでくる男の名前をいちいち訊いてまわれると思うのかと言いつつ放った。しかしレッドビターが彼の掌に半ソブリン金貨を押しつけ、自らの災難話を語ると、たちまち態度を変えた。彼は身を震わせている訪問者に上等のジャマイカラムをふるまい、最良のアドバイスを与えようと言った。ひとまず陸へ上がり、泊まるところを見つけて、ひと晩ぐっすり眠る。翌日十二時きっかりに船に来る。その時間までには彼が——乗務員のことだが——テリーが乗船したか確かめておく。もしまだだったら、レッドビターが自ら舷門を見張り、スターナティック号が汽笛を鳴らしてマージ川を出ていくまで、やって来る乗船客をしらみつぶしにあたればいい。

レッドビターとしては乗務員の言葉に従うしかなかった。彼は再び陸に上がった。川沿いの宿で安い部屋を借り、床に就く前にまたジャマイカラムをあおったが、寝椅子に横になったときにはひどく意気消沈していた。この先どうなるかわからず、たまらなく不安で惨めだった。そのうえ、ひと晩じゅう川を航行する汽船の汽笛や警笛のせいで一睡もできなかった。夜明け近くにようやくとうとうとたと思つたら、夢の中でスターナティック号はすでに出航し、時速五十ノットでマージ川を下っていくところで、船尾に立った赤毛の大男が大声で嘲笑いながら彼に向かってチョッキを振っているのだった。

〔著者〕

J・S・フレッチャー

1863年、英国生まれ。中学校卒業後、ロンドンに出て新聞社の編集助手や〈リーズ・マーキュリー〉紙の編集部員を経て専業作家となる。文筆家としての仕事は多岐にわたり、roman小説、ミステリ、歴史小説、田園喜劇など、幅広い分野で作品を発表。1935年死去。

〔訳者〕

中川美帆子（なかがわ・みほこ）

神奈川県出身。訳書にロナルド・A・ノックス『三つの栓』、マーガレット・ミラー『雪の墓標』、リリアン・デ・ラ・トーレ『探偵サミュエル・ジョンソン博士』（ともに論創社）。他名義による邦訳書あり。

## バービカンの<sup>ひみつ</sup>秘密

——論創海外ミステリ 243

---

2019年11月5日 初版第1刷印刷

2019年11月15日 初版第1刷発行

著者 J・S・フレッチャー

訳者 中川美帆子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1871-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします